

『「できるかな」と挑戦し友達と関わりながら、試して見付ける喜びを味わう』姿

単元名 「みずであそぼう」 【3/9時】
本時の目標 自分が作りたいシャボン玉ができるよう、友達と遊びながら、吹き方や道具の工夫に気付くことができる。

本時の授業について

本単元は、「内容（6）」を受け、季節を肌で感じられる活動、身近な物を工夫して使い、友達と関わりながら楽しく学ぶことができる活動として設定しました。単元の導入では、裸足で砂遊びをした後に水で足を洗い流し、水の気持ちよさを体感することで、様々な水遊びへの興味を引き出します。そして、幼稚園や保育所等でも経験しているシャボン玉遊びを子ども自身の手で工夫しながら行っていくことで、子どもの主体性を育もうと考えました。

本時では、授業の最初に「自分の作りたいシャボン玉を作れるように工夫してみよう」というめあてを確認したことと、主体的な活動を引き出すような環境を整えたことで、子どもが目的意識を持って取り組むことができました。また、自分の作りたいシャボン玉にするために、交流タイムで得た友達からのアドバイスやヒントを参考にしながら、何度も試した結果、大きなシャボン玉や連続して出てくるシャボン玉作りに成功し、「見て、見て。できたよ」「すごい」など達成感を味わうことができました。そして、授業の終わりには、「わたしも大きなシャボン玉を作りたい」「もっとやりたい」と次時への期待が膨らみ、笑顔が広がりました。



とても大きなシャボン玉を作りたい。早くやってみたい。

どんなシャボン玉を作りたいですか。



シャボン玉遊びで道具や方法を工夫したことが、水鉄砲、色水遊び、水に浮かぶおもちゃへと活動が広がり、さらなる道具の工夫や友達との関わりが増えました。

主体的な活動を引き出す環境設定

五感を働かせた多様な体験活動は、子どもの気付きの幅を広げ、質を高めます。

山本先生が教室内に十分に使える量の液や道具を用意したことで、子どもは自由に道具を選び、それぞれが考えた方法で「自分のシャボン玉作り」にチャレンジしました。

また、シャボン玉を飛ばす場所をテラスや中庭にするなど、思う存分活動できる環境を設定したことで、子どもは道具を上下左右に振ったり、走ったり、一回転したりしながらシャボン玉作りに没頭しました。

大きなシャボン玉を作りたい子どもは大きな入れ物にシャボン液を入れ始め、連続で出るシャボン玉を作りたい子どもは、洗剤の量を増やし、濃い液を作り始めました。家でストローにたくさんの穴を空けて持ってきた子どももいます。子どもの活動が主体的になっていきます。



液はたっぷりあった方がいい。



濃くしてみたよ。連続でできるかな。

気付きが広がる交流タイム

遊ぶ時間が十分確保されていたため、子どもはそれぞれに、濃さの違う液や形の異なるストローなどを何度も何度も試しながら、夢中になってシャボン玉作りに挑戦していきます。

交流タイムでは、ストローの口の大きさや形、液の濃さ、吹く息の加減などについて、友達同士で気付いたことを出し合いながら追究する姿が見られました。そのような中、シャボン玉をうまく作ることができない良佳さんが、周囲を見渡しています。それに気付いた山本先生は、近くにいる子どもを集めて、大きなシャボン玉を作っていた正光さんに「やってみて」と促しました。正光さんがシャボン玉を作る様子を見た子どもから、「ゆっくり吹いている」「液をたくさん付けている」などの声が上がりました。その声を聞いた良佳さんは、自分の吹き方と正光さんの吹き方の違いに気付き、試行錯誤を続け、自分ならではの吹き方を見付けました。



すぐ割れちゃう……



ゆっくり吹いてみよう！



見て、見て！ できたよ。

そして、授業後半には「できた」と良佳さんの喜びの声が上がりました。

気付きを自覚する振り返り

山本先生は、1年生の6月という時期を踏まえて、本時の振り返りを「発表」という形で行いました。友達の発表をうなずきながら聞く子どもの姿から、体験の共有化が図られていることがうかがえました。

「ゆっくり吹くと大きいシャボン玉ができました」という発表を受け、先生が「同じことを思った人はいますか」と全体に投げ掛けると、良佳さんの手がさっと挙がりました。良佳さんは「正光さんがやり方を見せてくれて、そうっと吹くようにしたらできました」と発表しました。

先生は「そうっと」に着目し、良佳さんにその様子を再現してもらいました。子どもたちは、「優しく吹いているね」「僕も輪っかをゆっくり動かしたら大きなものができたよ」と良佳さんの気付きと関連付けながら自分の気付きの質を高めました。こうして、シャボン玉について語る子どもたちは次時への期待を膨らませました。



めあてから振り返りまで、図や絵、ネームプレートを巧みに使った見やすい板書は、子どもが気付きを自覚する一助になります。